

「中東鉄道警備隊と満洲の軍事バランス: 1897-1907」

はじめに

本論で扱う中東鉄道警備隊（Охранная стража КВЖД、以下警備隊と略す）は、字義どおり中東鉄道の警備を行った部隊である。とはいえ、警備隊は単に鉄道沿線の警備業務に従事したのにとどまらず、義和団蜂起や日露戦争に参戦し、第一次大戦ではカフカースや東部の戦線に投入されるなど、満洲に留まらない活発な軍事行動を展開した。そのため警備隊に関する研究は各国で見られ、中国では薛が300頁を越える『中東鉄道護路軍と東北辺境政局』と題する単著を発刊している¹。戦闘記述にやや重きを置くものの、中露の史料を駆使した通史として高い水準にある研究書である。一方、ロシアでもいくつかの小論が発表されている²。先行研究の特徴として、ロシアにおける研究は警備隊の勲を高く評価するきらいがある。逆に、薛をはじめとする中国の研究では、警備隊は中東鉄道の武力発動を担保するものとしてその侵略性を強調する姿勢が根強い。こうした研究とは別に、警備隊には『偉大なる王』の著者バイコフ（Н.А. Байков）や、後に白衛軍の指導者となるデニーキン（А.И. Деникин）やコルニーロフ（Л.Г. Корнилов）といった人物たちが在籍したことから、彼らの自伝や伝記を通じて警備隊について言及がなされる。

警備隊に関する一次資料は、ロシア連邦国立文書館（以下 ГАРФ）と、ロシア国立歴史文書館（以下 РГИА）のフォンドにそれぞれ保管されている。また第一次大戦の前線における警備隊の軍事行動に関する史料はロシア国立軍事歴史文書館（РГВИА）にある³。管見の及ぶ限りでは、デイヴィッド・ウルフ（David Wolff）やウラジミール・ダツィシェン（В.Г. Дацышен）はРГИАの史料を自著に用い、ГАРФの史料を用いたのはミナコフの小論のみである⁴。日本側にも警備隊の蔵書が大量に保管されていた時期があった。1922年に南満

¹ 薛衍天『中東铁路护路军与东北边疆政局』社会科学文献出版社、1993年。なお同書については、満洲におけるロシア人について精力的に調査しているバシリエンコが薛の見解を下記で紹介している。

Василенко Н.А. История Российской эмиграции в освещении современной китайской историографии. Владивосток, 2003. С. 41.

² ① *Сухачева Г.А.* Охранная стража КВЖД и хунхузы (1897-1920) // *Каневская Г.И.* (ред.) Россияне в Азиатско-Тихоокеанском регионе. Сотрудничество на рубеже веков. Т. 2. Владивосток, 1999. С. 110-117. ② *Корнева Л.В.* Из истории военной охраны КВЖД // *Дубинина Н.И.* (ред.) Дальний Восток России—Северо-Восток Китая: Исторический опыт взаимодействия и перспективы сотрудничества. Хабаровск, 1998. С. 55-57. ③ *Иконникова Т.Я.* Проблема охраны КВЖД в связи с мобилизацией на фронт частей Заамурской пограничной стражи в 1915 г. // *Дубинина Н.И.* (ред.) Там же. С. 58-61.

①は帝国主義の表象といった中国側の警備隊に対する見方も紹介するのに対し、②は警備隊を顕彰する論調が強い。③は第一次大戦に際して、兵力不足のために警備隊がホルヴァート中東鉄道管理局長の反対を押し切って前線に動員された点を描く。②と③には注が付されていない。

³ *Снежко Н.Г.* Фонды российского государственного военно-исторического архива. М. 2001. С. 127.

⁴ David Wolff, *To the Harbin Station: The Liberal Alternative in Russian Manchuria, 1898-1914*

(Stanford: Stanford University Press, 1999). *Дацышен В.Г.* Русско-китайская война:

Маньчжурия 1900 г. СПб., 2000. *Минаков В.П.* Н.М. Чичагов: Начальник Заамурского округа

州鉄道の大連図書館が警備隊から購入した1万8千冊の蔵書がそれである⁵。通称オゾ

(офицерство Заамурского округа、略称 ОЗО) 文庫と呼ばれたこの蔵書は大連図書館が管理して目録も発行したが⁶、日本の敗戦に伴う混乱の中で行方不明となっている。

上記に見るような先行研究と史料の状況を踏まえて、本論は警備隊が満洲における軍事バランスの均衡に与えた影響を、警備隊が満洲に着任した1897年から、日露戦争後に日本と清、ロシアが満洲における兵制を整えた1907年までを中心に論述するものである。警備隊はその草創期こそ約700名で構成されたが、日露戦争前には兵員2万を越える規模へと拡大した。満洲に駐留した初めての外国軍隊である警備隊が、地域の軍事バランスに影響を及ぼしたことは容易に想像される。そこで本論は、警備隊と後発の日本の独立守備大隊、そして東三省総督設置後の清の兵数を比較した上で、警備隊が満洲という地域に与えた軍事的な影響を相対的に考察する。こうした軍事バランスを論じるのに、兵数に着目して叙述するのみでは不十分なのは無論である。軍事力は当事国の政治的影響力といったマクロな要因から、装備、士気、配置等といったミクロな要因に至る様々な要素が検討されて初めて導き出されよう。しかし政治力や士気は数字で表せるものではなく、装備や配置で軍事力の優劣を判定するのは手に余る。ゆえに、本論は客観的な評価の容易な兵数に着目することで、満洲における軍事バランスに警備隊が及ぼした影響を相対的に描出する次第である。

なお、警備隊は後述するように1901年に名称を変更しているが、本論は便宜上、警備隊の呼称を一貫して使用する。本文中の日付は露暦を用いており、西暦に戻すには19世紀で12日、20世紀では13日を加算する必要がある。また、ロシアの度量衡の単位1ヴェルスタは500サージェン=1.067キロメートルに換算される。

1 中東鉄道警備隊の成立

鉄道警備隊の構想の萌芽は、中東鉄道の敷設をめぐる1896年1月のプリアムール総督ドゥホフスコイ(С.М. Духовской)の上奏と、同年3月31日の蔵相ヴィッテ(С.Ю. Витте)の反論の中に見られる。ドゥホフスコイは自らが歩兵師団参謀長として鉄道建設に従事した経験や、ウスリー鉄道の例を持ち出して、「外国人労働者に代わる、秩序ある頑健なロシア軍人を有することなく、労働者の秩序と賃金の急騰を抑え込むのは困難」⁷であるから、中東鉄道にも鉄道大隊は不可欠であると説いた。これに対し、ヴィッテは軍人の参加が工事に良い影響を及ぼすことは認めたと、一個ないし数個大隊が満洲に派遣されて新聞雑誌に取り上げられれば鉄道敷設が相当複雑化する、と懸念を表明した。そのため、もし派遣

ОКПС в 1903-1910 годах // Вопросы истории. 2004. №5. С. 140-144.

⁵ 河田いこひ「オゾ文庫：満鉄に買い取られたロシア軍所属図書館」『近現代東北アジア地域史研究会 News Letter』第7号、1995年、27頁。

⁶ *Общество Южно-Маньчжурской железной дороги*. Каталог русских книг. Дайрен, 1930.

⁷ Первые шаги русского империализма на Дальнем Востоке (1888-1903 гг.) // Красный архив. 1932. Т. 3(52). С. 90. 佐々木揚編訳『十九世紀末におけるロシアと中国：「クラースヌィ・アルヒーフ」所収史料より』巖南堂書店、1993年、74頁。訳文は筆者による。

するならば満洲から遠く離れた軍管区の下士卒を予備役に編入して、最小限の武器しか持たさず、軍人が鉄道建設に従事していることは完全に秘密にするという措置が必要であるという意見を添えた⁸。この鉄道大隊をめぐる議論こそが、警備隊の濫觴と考えられる。しかし、中東鉄道の敷設に関する 1896 年の交渉で、清の代表李鴻章はロシア側が提起した鉄道によるロシア軍の無制限の通過と使用には反対し⁹、李の意見は露清同盟第五条と中東鉄道敷設契約第八項に反映された。軍人の通過にすら過敏な清を前にして、鉄道大隊を投入することは困難となったと言えよう。中東鉄道副理事長ケルベジ (С.И. Кербедзь) は 1898 年末に増派する際に、警備隊を労働力にもすることを提案する。しかし、隊員を労働力にもする考えは規律と軍事装備の観点から中東鉄道理事会で支持が得られず、1899 年 1 月 27 日の理事会決議で否決された¹⁰。結局、警備隊とは別置の工兵からなるザアムール鉄道大隊 (Заамурская железнодорожная бригада) が作られるのは 1903 年 3 月 25 日の勅令によってであり、日露戦争中に鉄道の修繕や破壊に従事した¹¹。

一方、ロシアの技師や労働者を警備する人員を満洲へ送り込む計画自体は放棄されなかった。理事会は 1896 年の敷設契約第五項「清国政府は全ての攻撃から鉄道と職員の安全を保障する措置に配慮する。会社は鉄道の管理などで必要と認められる場合には、自らの選択で外国人もしくは地元民を雇用する権利を有する」¹²という条項を利用した。1897 年 5 月 10 日、理事会は警備隊を編成する決議を行い、理事のロマノフ (П.М. Ромвнов) が陸軍の代表と会談して、正規軍とカザークから兵員を借り受けた。また警備隊員には陸軍が武器を与え、動員その他の通常任務を免除することも取り決められた¹³。同年 6 月 10 日の皇帝の裁可を経て、7 月 20 日に理事会は第四ザカスピ歩兵大隊隊長であるアレクサンドル・ゲングロス (А.А. Генгросс) 大佐を部隊長に任命する。兵卒はカザークから募集され、チェルケス、クバン (二隊)、オレンブルグ、混成部隊の五中隊、計 750 名で編成された¹⁴。こうして組織された第一陣は、1897 年 11 月 1 日にオデッサを義勇艦隊の汽船で出航し、長崎を経由して 12 月 26 日にウラジオストクに到着した。しかし、一梯団に値する第一陣の人数では不足であるとして、理事会は先遣隊が現地に到着する前の同年 10 月には増派を決定した。新たに編成された二梯団に当たる 1390 名のカザークは、1898 年 4 月にオデッサを発った¹⁵。1898 年 12 月にはブリアムール軍管区の歩兵 250 名も編入され、これが警備隊で最

⁸ Там же. С. 90. 佐々木『十九世紀末におけるロシアと中国』、88 頁。

⁹ Глинский Б.В. Пролог русско-японской войны : Материалы из архива графа С.Ю.Витте. Пг., 1916. С. 36-37.

¹⁰ Нилус Е.Х. Исторический обзор Китайской Восточной железной дороги: По поручению Правления Общества и под ред. спец. комиссии. Харбин, 1923. С. 508.

¹¹ Русско-японская война 1904-1905 гг. Работа военно-исторической комиссии по описанию русско-японской войны. Т. 7(2). СПб., 1910. С. 83-84.

¹² Мясников В.С. (ред.) Русско-китайские договорно-правовые акты (1689-1916). М., 2004. С. 213. ニルスは契約第六項に基づくとしているが、スハチェバが記すように、むしろ第五項の方が該当すると考えられる。Сухачева. Указ. соч. С. 112.

¹³ David Wolff, op. cit., p. 65.

¹⁴ Голицын В.В. Очерк участия охранной стражи Китайской Восточной железной дороги в событиях 1900 года в маньчжурии. Харбин, 1910. С. 5.

¹⁵ Нилус. Указ. соч. С. 506. その構成はチェルケス (1 中隊)、クバン (2)、ドン (3)、オレンブルグ (3)、

初の歩兵となった¹⁶。部隊の指揮権は、中東鉄道技師長のユーゴビッチ (А.И. Югович) が持つ¹⁷。文官である一般の技師たちと軍出身の警備隊員の間では初め対立があったが、ゲングロスと技師長など幹部の関係は良好であったようだ。

この部隊が到着するまでの間、建設者の警備に当たっていたのはドゥホフスコイが派遣した 800 名の兵士である¹⁸。警備隊はこの部隊と交代して、鉄道建設の各工区に赴き警備に当たった。鉄道の完成後は線路脇に哨所が建てられて、5 人から 20 人の兵士が配備され、哨所から哨所へ連続的に偵察が行われる¹⁹。その範囲は片側 25 ベルストを直接の範囲とし、75 ベルストを勢力圏と位置づけた²⁰。またハルビンからハバロフスクまでの松花江沿いにも哨所を設けて警備を行い、鉄道の従業員と荷車の護送を行い、電線の敷設も行った²¹。1903 年 10 月 1 日には、警備隊から人員を引き抜いて四署から成る警察も組織される²²。警備隊司令部は初め旧ハルビンに置かれ、全線を三区に分けて警備した。西部線は富拉爾吉駅に、東部線は一面坡駅、南満洲支線では鉄嶺駅に本部が置かれている²³。

隊員たちは好条件で迎えられた。正規軍で年に 2 ルーブル 70 コペイカを受け取るだけだったのが、兵卒は月給 20 ルーブル、下級将校は月に 40 ルーブルが約束された。隊長のゲングロスになると年俸 1 万 5 千ルーブルである²⁴。警備隊の諸経費は全て会社が負担し、1899 年までの支出は 1 千 497 万 9 千 211 ルーブリ 37 コペイカとなった²⁵。また現役将校は中東鉄道警備隊へ派遣中は一時的に予備役に編入しており、その勤務年限は現役と同様の取り扱いをされていた²⁶。彼らには龍の徽章が描かれた武器と制服も支給されたが、これらは敬虔なカザークの間で「悪魔の作りし物」として忌み嫌われた。制服の一部も正規軍と違い黄色であった。ウルフは、こうしたデザインの変更は満洲がロシアにとって「黄ロシア」であることを暗示していたと考えている²⁷。しかし黄色地に龍(黄龍)は清の国旗と同じデザインであり²⁸、中東鉄道が露清友好の事業であることを演出するために行われた措置ではないだろうか。実際、草創期の中東鉄道の旗章は白黄二色の地に龍と太陽が描かれたもの

ウラル (1) の計 10 中隊である。

¹⁶ *Нилус*. Указ. соч. С. 508.

¹⁷ Там же. С. 503.

¹⁸ Там же. С. 38.

¹⁹ *Мелихов Г.В.* Маньчжурия далекая и близкая. М., 1991. С. 104.

²⁰ Там же. С. 106.

²¹ *Корнева*. Из истории военной охраны КВЖД. С. 125-127.

²² *Нилус*. Указ. соч. С. 538.

²³ *Орлов Н.В.* Заамурцы 1898-1917 гг. Исторический очерк в пяти частях (1) // *Россияне в Азии*. 1998. №5. С. 93. この論文は警備隊員だったオルロフが 1939 年にハルビンで地下出版した警備隊の通史全五部の内、第一部が三号にわたって紹介されたものである。

²⁴ Wolff, op. cit., p. 69.

²⁵ *Общество Китайской Восточной железной дороги*. Общий обзор к отчету по постройке Китайской Восточной железной дороги : По железнодорожному предприятию. 1897-1903 гг. СПб., 1905. С. 65.

²⁶ 弓場盛吉『東支鉄道を中心とする露支勢力の消長』上巻、南満洲鉄道株式会社哈爾賓事務所運輸課、1928 年、55 頁。

²⁷ Wolff, op. cit., p. 66.

²⁸ 「黄龍旗」は、1862 年に艦船の識別のため制定された。小野寺史郎「中国最初の国旗:清朝・黄龍旗について」『中国研究月報』第 57 卷 10 号、2003 年、22-23 頁。

であった²⁹。

こうして増員を重ねた警備隊は、義和団蜂起直前の1900年6月1日の時点で、将校62名、歩兵1千950名、騎兵2千450名、馬匹2千5頭で構成されるに至った³⁰。

2 義和団蜂起と日露戦争

体制を整えつつあった警備隊を迎えたのが義和団蜂起である。この蜂起と警備隊の関係はジョージ・レンセン (G.A. Lensen)³¹や先に引用したダツィシェンの詳細な研究がある。また満洲における戦闘の天王山に当たるハルビン包囲については別に発表した³²、本論では義和団蜂起と前後して警備隊が急激に拡大したことを確認するに留める。警備隊はすでに蜂起前から鉄道敷設に反対する住民や馬賊にとって標的とされていた。1898年8月に2名のカザークが殺害されたのを皮切りに、99年にも西部線や南満洲支線を中心に隊員や労働監督が殺傷され、1900年初めになると武力衝突は日常的なものとなっていた³³。不穏な満洲の情勢を見てとったヴィッテは増派に乗り出し、1900年5月中旬には警備隊を5千人に拡大することで清政府と合意した。蜂起の勃発する6月には同月2日に6千人、16日に7千人、22日に1万1千人に増強する裁可を矢継ぎ早に皇帝から得る。また陸軍大臣との協議の上、プリアムール軍管区から更に兵を借り受ける交渉も進められた³⁴。しかし上記の増派は間に合わず、その実行は義和団蜂起の制圧後に持ち越された形になる。1900年の一連の戦闘で、隊員は将校5名が戦死、7名が負傷、兵卒は141名が戦死した（負傷者は記載なし）³⁵。

義和団蜂起で矢面に立って死闘を演じたことは警備隊の殊勲とされ、1900年12月4日には、大蔵大臣を長 (Шеф) とする独立国境警備軍団の軍装が隊員に与えられた³⁶。独立国境警備軍団とは、ヴィッテの主導のもと1893年10月15日の勅令により設立された部隊で、大蔵省が国境沿いの密輸と密出入国の防止のために隷属させていた³⁷。警備隊の制服の色は改められて緑か黒となり、黄龍の徽章は廃止されて³⁸、もはや隊員がロシア帝国の軍人であることが隠されることはなくなった。同年12月22日には、警備隊からゲングロスとミツ

²⁹ Нилус. Указ. соч. С. 33.

³⁰ Голицин. Указ. соч. С. 112.

³¹ George A. Lensen, *The Russo-Chinese War* (Florida: Diplomatic Press), 1967.

³² 拙稿「義和団蜂起とハルビン」『セーヴェル』第21号、2005年。

³³ Дацишен. Указ. соч. С. 44-45.

³⁴ Глинский. Указ. соч. С. 110-111.

³⁵ Голицин. Указ. соч. С. 363-368.

³⁶ Полное собрание законов Российской империи (以下 ПСЗ) . Собр. 3-е. Т. 20. СПб., 1900. С. 1077 (№19316).

³⁷ Плеханов А.А., Плеханов А.М. Отдельный корпус пограничной стражи императорской России : 1893-1917. М., 2003. С. 25-27. 中東鉄道警備隊が編入される直前の1901年1月1日には、独立国境警備軍団は全7管区から成り、将校1千79名、兵卒3万6千348名、軍医(准医師含む)134名を数えた。 Там же. С. 270-271.

³⁸ Rosemary K.I. Quested, *"Matey" Imperialists? : The Tsarist Russians in Manchuria, 1895-1917* (Hong Kong: Centre of Asian Studies, University of Hong Kong, 1982), p. 100.

エンコ (П.М. Мищенко) の兩名に勲四等ゲオルギー勲章も授与される³⁹。しかし、義和団蜂起は警備隊の員数不足と補強をロシア政府に認識させることにもなり⁴⁰、その増強と指揮系統の改編が図られた。ヴィッテは、軍装を支給した12月4日には隊員を1万6千人にまで増やす裁可も得て、ユーゴビッチに更に増派が必要かを問い合わせている⁴¹。最終的に、陸軍省との合意の上で警備隊を2万5千人にまで早急に増強することになり、新たに砲兵も加えられることになった。1901年5月18日には、警備隊を歩兵中隊55個・騎兵中隊55個・砲兵中隊6個・訓練部隊25個からなる四旅団に再編する事が裁可される⁴²。指揮系統では、1901年1月9日の勅令により、警備隊は独立国境警備軍団に編入されて「特別管区」を形成することになった(第一項)⁴³。また指揮権は技師長から大蔵大臣へと移行した(第三項)。こうして、警備隊は正式名称を独立国境警備軍団ザアムール管区 (Заамурский округ отдельного корпуса пограничной стражи) へと改める。改編により、警備隊は一私鉄会社の警備員という偽装を解き、ロシア軍の一翼に位置づけられたと言えよう。とはいえ、所属は変更されてもその経費は会社が負担し続け⁴⁴、1910年代になっても会社の経営を圧迫することになる⁴⁵。

上記の警備隊の再編には、ゲングロス大佐が転出して用兵の専門家であるディーテリッヒス将軍 (И.Я. Дитерихс) が当たったが、彼自身はあまり警備隊の意義などに理解がなく、参謀長のボグダノビッチ中佐 (С.И. Богданович) が支えた。1903年7月1日、中東鉄道が建設局から管理局に移管されたのを機に、警備隊をよりベテランに任せる方針からニコライ・チチャーゴフ中将 (Н.М. Чичагов) が任じられる⁴⁶。将校の訓練不足が正規軍から嘲笑の種だった警備隊は、彼の下で「全ての戦闘単位関係の中で見本」⁴⁷へと変貌する。こうして警備隊は日露戦争の開戦前に歩兵1万4千872名、騎兵9千128名、砲兵728名(砲26門)を有する大部隊となった⁴⁸。

日露戦争が勃発した1904年1月27日には、極東太守アレクセーエフ (Е.И. Алексеев) によって警備隊は「中東鉄道の警備全般」⁴⁹の任務につくことを命じられた。警備隊は四つの区域に分かれて警備を開始し、第一区は西部線(満洲里からハルビン間)、第二区は東部線(ハルビンからポグラニーチナヤ間)、第三区は南満洲支線(ハルビンから開原、開原か

³⁹ Список офицерам, награжденным орденом Св. Великомученика и Победоносца Георгия за китайскую войну 1900-1901 гг. // Военный сборник. 1907. №4. С. 280-281.

⁴⁰ Нилус. Указ. соч. С. 511.

⁴¹ Романов Б.А. Россия в Маньчжурии (1892-1906). Л., 1928. С. 280. (ロシア問題研究所訳『露西亜帝国満洲侵略史』ナウカ社、1934年、303頁)。

⁴² Нилус. Указ. соч. С. 512.

⁴³ ПСЗ. Собр. 3-е. Т. 21. СПб., 1901. С. 23 (№19547).

⁴⁴ Плеханов А.А., Плеханов А.М. Указ. соч. С. 47.

⁴⁵ その額は年間800万ルーブルに達し、1910年以降の会社の黒字も警備隊の予算に費消されたという。

Штейнфельд Н. Что делать с Манчжурией? Харбин, 1913. С. 12.

⁴⁶ Орлов. Заамурцы 1898-1917 гг. Исторический очерк в пяти частях (3) // Россияне в Азии. 2000. №7. С. 274.

⁴⁷ Меллихов. Указ. соч. С. 104.

⁴⁸ Русско-японская война 1904-1905 гг. Т. 1. СПб., 1910. С. 375. 砲兵数は同ページを用いた筆者の計算による。

⁴⁹ Минаков. Указ. соч. С. 143.

らポルト・アルトゥール間の二小区)、第四区は松花江沿岸(ハルビンから哈拉蘇々)を担当する⁵⁰。全部隊の半数以上は第三区に配置された。また沿線では嫩江と松花江に架けられた橋梁の警備に重点が置かれる。ロシア軍の兵站を担う中東鉄道は開戦当初から日本軍の攻撃目標で、早くも1904年4月19日には南満洲支線の海城駅附近において鉄道の橋脚30ベルストが破壊された。路線の修復は早急に終わったものの、この件が鉄道守備の手薄さを知らしめることになり、4月22日にはシベリア第一軍団から2中隊が鉄道の警備に派遣される⁵¹。これ以後、正規軍や義勇軍から鉄道守備の兵員が増派され、1905年2月には警備隊を含めて5万人以上が鉄道の防衛に割かれるに至った⁵²。満洲が戦場となった場合、鉄道守備の兵力は明らかな不足であった。このことが、ポーツマス講和会議でロシアが鉄道守備の軍縮に強い難色を示した一因と考えられる。

1905年8月16日の講和会議では、「線路財産及運輸に必要な保護を加え」⁵³の守備兵数を一キロ当たり5名に制限する覚書が日本側から手交された。これを読んだロシア全権ヴィッテは、満洲が平和を回復し、静謐になったならばこの兵数でも足りるとしたが、今の状況ではこの兵数では不足であると主張した。ヴィッテはこの件については別に交渉を設けることを主張し、この日は結論を見ていない。日本の全権小村寿太郎は8月21日の撤兵条件に関する協議でもこの件を持ち出し、一キロ当たり5名という主張を繰り返した。ヴィッテは、この件は両国の軍司令官が別に協議を持つように提案して再び確答を避けた。これに小村が、実際は一キロに2、3名で十分だと挑発したことがヴィッテの反論を呼んだ。ヴィッテは「僅少ノ兵ヲ駐メ置キテハ一朝事変アル場合ニ安全保護ノ目的ヲ達スルコト難シ」⁵⁴と懸念を表明する。そこで小村は10名に上乘せするが、ヴィッテは20名という対案を出す。小村はこれを一蹴し、中間を取った15名を提案して合意に至った。こうしてポーツマス講和条約追加約款第三項で、日本とロシアは鉄道守備の人員を一キロ当たり15名に制限する。拡大につぐ拡大を重ねた警備隊の規模にも歯止めがかかるかに見えたが、事態はそう動かなかつたことは後述する。

3 日露戦争後の軍事バランスの鼎立

講和条約が締結されて、満洲に展開した日露両軍は順次撤退し、鉄道守備兵のみが駐留できることとなった。日本も上記の条項に基づき鉄道警備に当たる部隊を編成する。まずは戦後の満洲における日本の統治組織の変遷について述べておこう。

戦時下における軍政は満洲軍総司令部内の総兵站監部が担った。講和条約の成立に伴って満洲軍総司令部は自軍の撤退後に代替機関を設置することを中央に要望し、1905年9月に関東総督府が遼陽に創立される⁵⁵。関東総督府は満洲駐劄師団と呼ばれる二個師団と大連

⁵⁰ Русско-японская война 1904-1905 гг. Т. 1. С. 375.

⁵¹ Русско-японская война 1904-1905 гг. Т. 7-2. С. 147.

⁵² Там же. С. 149.

⁵³ 「日露講和談判筆記」外務省編『日本外交文書』第37・38巻別冊・日露戦争V(1960年)、492頁。

⁵⁴ 同上、522頁。

⁵⁵ 中山隆志『関東軍』講談社、2000年、14頁。

湾要塞諸部隊を隷下に置いた⁵⁶。しかし、満洲における軍政が継続されたことは清やイギリス、アメリカの反発を招き、伊藤博文韓国統監の主導で問題を討議する「満洲問題に関する協議会」が1906年5月に開催される。協議の結果、「満洲行政の責任は宜しく之を清国に負担せしめねばならぬ」⁵⁷という伊藤の意向が強く反映されて、満洲における軍政は順次撤廃し、関東総督府を平時組織に改めて関東都督府へ改組することとなった。関東都督には「関東州ヲ管轄シ並南満洲ニオケル鉄道線路ノ保護及取締ノ事ヲ掌ル」⁵⁸権限が与えられる。都督府は民政部と軍政部の二部に分かれ、1906年7月に設置された陸軍部は「関東都督ノ所轄内ニ於ケル陸軍一般ニ関スル事ヲ掌ル」⁵⁹と定められた。以後、在満兵力は関東都督が軍を統率し、都督府陸軍部が実務を担当する体制が確立された。

総督府から都督府への移行は在満兵力の削減も伴った。満洲駐劄師団の上記二個師団が1907年3月に転出すると、同年10月からは一個師団のみが二年交代で駐留する。これを補うように発足したのが独立守備大隊である。独立守備大隊は「関東都督ニ隷シ南満洲鉄道線路（及之ニ付属スル電線其ノ他ヲ含ム以下同ジ）ノ守備」⁶⁰のため編成された部隊で、兵は予備役から募集された。独立守備大隊は当初から六大隊を予定されていたが、まず二大隊が1907年4月に到着し、1918年に至ってようやく六大隊編成となった⁶¹。大隊司令部は公主嶺に置かれ、各大隊の配置は「情勢の動きにより、適宜変更」⁶²された。こうして、1907年に日本の在満兵力は満洲駐劄師団一個と独立守備大隊六個に定まり、約1万400人を上限として1931年まで推移する⁶³。なお、陸軍省軍事課が作成した独立守備大隊の編成原案では部隊に鉄道守備大隊という名称を冠していたが、寺内正毅陸相の査閲後に鉄道の二文字は「独立」に置き換えられる。鉄道守備大隊と称する部隊を作ってしまったのは正規軍の存在理由が疑われ、「我軍備ニ関シ列国ヲシテ疑義ヲ抱カシメ」⁶⁴という理由であった。都督府への改編にも表れるように、満洲での行動に日本はまだ各国の目を憚っていた。

日露戦争が行われたのは清朝の故地である満洲であり、当然清に及ぼした影響も大きかった。清は満洲の封禁を緩和して行政を改革し、植民を進め、軍事を増強して両国と対抗しようとする⁶⁵。中でも満洲の軍再編を主導して、地域の主導権を奪回する試みの中心にい

⁵⁶ 防衛庁防衛研修所戦史部『陸軍軍戦備』朝雲新聞社、1979年、54頁。なお、大連要塞は1906年9月に旅順要塞に合併された。同書、53頁。

⁵⁷ 栗原健『対満蒙政策史の一面：日露戦後より大正期にいたる』原書房、1966年、23頁。

⁵⁸ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A03020679800 (第2画像目)、御署名原本・明治三十九年・勅令第百九十六号・関東都督府官制(国立公文書館)

⁵⁹ JACAR. Ref. A03020680600 (第2画像目)、御署名原本・明治三十九年・勅令第二百四号・関東都督府陸軍部条例(国立公文書館)

⁶⁰ JACAR. Ref. C03022855100 (第4画像目)、軍務局・独立守備大隊勤務令制定の件(防衛庁防衛研究所)

⁶¹ 外山操、森松俊夫編著『帝国陸軍編制総覧』芙蓉書房出版、1987年、267頁。

⁶² 防衛庁防衛研修所戦史部『関東軍(1)』朝雲新聞社、1969年、14頁。

⁶³ 中山は「満洲事変まで、合計1万400名程度が満洲における常備兵力であった」(『関東軍』、19頁)と断じているが、独立守備大体は上記のように六大隊編成になるまでに時間を要し、1925年には二大隊が削減されるなど、その兵数は流動的であった。防衛庁防衛研修所戦史部『関東軍(1)』、14頁。

⁶⁴ JACAR. Ref. C03022855000 (第24画像目)、軍務局・独立守備大隊編成要領制定の件(防衛庁防衛研究所)

⁶⁵ 康沛竹「日露戦争後の清廷東北防务」『近代史研究』第3期、1989年、77頁。

たのは袁世凱だと思われる。日露戦争前後の清において兵馬の権を握っていたのが、李鴻章を継いで1901年から北洋大臣兼直隸総督の任にあった袁世凱である。彼が直隸と山東省に配置していた北洋六鎮（以下、北洋軍）は近代化を施された軍隊で、1904年初頭には6万人以上が指揮下に置かれていた⁶⁶。袁は1905年11月に清国全権の一人として戦後の満洲に関する日清交渉に臨み、「該地方（筆者注：満洲）ニ両国ノ兵ヲ駐ムルコトハ最モ騒乱ノ起ル原因」⁶⁷で、「満洲ニ於ケル官民等ガ満洲ニ外国兵ノ在ルコトハ非常ニ困難ヲ受クル」⁶⁸と主張し、鉄道守備は清国軍が代わって行うので、日本軍は撤退してもらいたいと迫った。これに対し、日本側の全権小村寿太郎は講和会議の経緯を説明して日本軍の駐留を譲らず、締結された条約では「若シ満洲地方平靖ニ帰シ外国人ノ生命財産ヲ清国自ラ完全ニ保護シ得ルニ至リタル時ハ日本国モ亦露国ト同時ニ鉄道守備兵ヲ撤退スベシ」⁶⁹と定められるに留まった。外交交渉により満洲から外国軍を一掃できなかった事は、袁が現地の軍政改革を推進した一因と思われる。

日露戦後の満洲における兵力は、八旗兵を除いて奉天・吉林に各2万弱、黒龍江に4千弱という配分であった⁷⁰。しかしその兵は、軍紀も緩く兵器にも不慣れで、新たに編成した軍にもアヘンが蔓延していた⁷¹。このような満洲の軍改革には、行財政改革に辣腕をふるった盛京將軍趙爾巽も手をつけているが、本格的に始動するのは東三省総督徐世昌が赴任してからである。東三省総督とは、1906年に東三省視察大臣に任じられた徐世昌が袁と協議して創設されたもので⁷²、盛京や吉林、黒龍江の駐防將軍職に代わって1907年に設けられた東三省（奉天、吉林、黒龍江）を統轄した⁷³。総督の徐は袁の若い頃からの親友であり、省ごとに置かれた巡撫職にも袁に連なる人材が送り込まれた⁷⁴。満洲の実権は袁の手中に入ったのである⁷⁵。

1907年の徐の赴任と共に北洋軍の満洲移駐も始まり、清の軍備増強は加速した。北洋軍の陸軍第三鎮（軍官佐748名、兵夫1万1千788名）は直隸省から吉林省、奉天省昌図に移駐した⁷⁶。同じく1907年に奉天に進駐した陸軍第二混成協（5千109名）⁷⁷は北洋軍第二、四鎮から選抜された兵で、両鎮は北洋軍の主力であった⁷⁸。新民府などに駐在した陸軍第二

⁶⁶ Jerome Chen, *Yuan Shih-kai, 1859-1916: Brutus Assumes the Purple* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1961), p. 79. (守川正道訳『袁世凱と近代中国』岩波書店、1980年、86頁)。

⁶⁷ 「満洲ニ関スル日清条約締結ノ件」外務省編『日本外交文書』第38巻第一冊（1958年）、279頁。

⁶⁸ 同上、280頁。

⁶⁹ JACAR. Ref. A03020693900（第7画像目）、御署名原本・明治三十九年・条約一月二十九日・日清間満洲ニ関スル条約（国立公文書館）。

⁷⁰ 澁谷由里「奉天省における革命の『挫折』：地方軍維持経費をめぐる考察を中心にして」『近きに在りて』第39号、2001年、174頁。

⁷¹ 康「日俄戦争後の清廷東北防務」、85頁。

⁷² 西村成雄『中国近代東北地域史研究』法律文化社、1984年、60頁。

⁷³ 戴逸編『二十六史大辭典：典章制度卷』吉林人民出版社、1993年、377、890頁。

⁷⁴ 西村『中国近代東北地域史研究』、60頁。

⁷⁵ 市古宙三『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、1971年、381頁。

⁷⁶ 徐世昌撰、李樹田校点『東三省政略』吉林文史出版社、1989年、640-642頁。

⁷⁷ 同上、648-649頁。

⁷⁸ 澁谷「奉天省における革命の『挫折』」、175頁。これに対しChenは、北洋軍で袁が特別な重要性を持

混成協（5千109名）もまた北洋軍第五、六鎮からの選抜兵である。1907年までに満洲で再編されたのは、吉林陸軍歩兵第一協と奉天陸軍第一、二標などで軍備の中心は北洋軍であった。徐は移駐した軍と合わせて約5万人を満洲各地に配置する⁷⁹。

上記の日清両国の戦後体制の確立と軍の再編を、ロシアはどのように捉え、警備隊にはどのような影響を及ぼしたのか。原暉之が指摘したように、ロシア側が強い懸念を示したのは清の動向である⁸⁰。中でも、原の示唆する第一次日露協商が果たした役割は見逃せない⁸¹。1907年7月17日に妥結した日露協商は、両国がポーツマス条約で生じた権利を互いに尊重すること謳っており、ロシアが日本より清の軍事動向をより注視する結果になったと推測されるためだ。また本論で述べたように、日本の在満兵力は約1万、東三省総督が隷下に置いたのは約5万であるから、軍事バランスを考えた場合、ロシア側が強く意識するのが清の軍事動向であるのは理に適う。例を二つ挙げる。1905年10月に直隸省河間府で行われた北洋軍の軍事演習を観閲したロシア軍参謀は、観戦記を認めて清軍全体の分析も行った。中でも北洋軍の兵士は「酒を飲まず、忍耐強く、素晴らしい健康と気力に恵まれ、従順で、死に対し冷静だ。優秀な将校の手にあれば容易ならぬ敵となろう」⁸²と高く評価している。そして序文ではこの「覚醒した隣人であり復興した帝国」⁸³の軍に注意を促した。警備隊員だったデニーキンもまた北洋軍には注意を払っており⁸⁴、清に比べて「極東のロシア軍の少なさと際立った（筆者注：低い）質は国家の重要事項の中で切実な問題である」⁸⁵と述べ、その増強を求めた。

ポーツマス講和会議の結果、中東鉄道は寛城子以南の路線を失い、支線を除く総延長は1千613.1ベルストとなった⁸⁶。警備隊の員数に換算すると、その上限は約2万5千800人になる。これを受けて、1907年10月14日に警備隊は歩兵中隊52個、騎兵中隊42個、砲兵中隊4個、訓練部隊25個に再編成された⁸⁷。1901年に比べると部隊数は確かに削減されている。しかしその員数は、1910年の時点で将校586名、兵卒2万1千110名、馬匹6千600頭を有し⁸⁸、警備領域は大幅に縮小したにも拘わらず、兵力の規模は戦前に近い水準を回復している。

たせていたのは第四、六鎮であったと述べる。Chen, op. cit., p. 77. いずれにせよ、満洲への移駐兵には北洋軍の精鋭が選抜された。

⁷⁹ 康「日俄戦争後の清廷東北防務」、86頁。

⁸⁰ 原暉之『シベリア出兵：革命と干渉（1917-1922）』筑摩書房、1989年、39-40頁。原暉之「日露戦争後のロシア極東：地域政策と国際環境」『ロシア史研究』第72号、2003年、12頁。

⁸¹ 原「日露戦争後のロシア極東：地域政策と国際環境」、12頁。

⁸² Первые большие маневры китайской армии в октябре 1905 г. изд. штаба войск Дальнего Востока. Харбин. 1906. С. 14.

⁸³ Там же. С. vi.

⁸⁴ Деникин А.И. Русско-китайский вопрос: Военно-политический очерк. Варшава. 1908. С.23-28.

⁸⁵ Там же. С. 40-41.

⁸⁶ 満洲里からウスリー鉄道との接続点までが1千389.57ベルスト、ハルビンから寛城子までが223.53ベルストである。支線は建設年月日が不明のものがあるので除いた。Тищенко П.С. Китайская Восточная железная дорога 1903-1913 гг. Харбин, 1914. С. 165.

⁸⁷ Нидус. Указ. соч. С. 513.

⁸⁸ Там же. С. 513.

結び

中東鉄道警備隊は鉄道大隊の代替として構想されたが、期待された労働力としての役割を担うことはなかった。結果として、警備隊は沿線の防衛任務に特化した会社の警備員となる。とはいえ、隊員は現役の軍人から成っており、警備隊は実質的な軍隊であった。曖昧なその地位は、義和団蜂起の後に大蔵省管轄の独立国境警備軍団に編入されることで確定した。日露戦争でも警備隊は鉄道の破壊を企図する日本軍と交戦する。こうした活発な軍事行動と、ヴィッテの庇護、それに政府の満洲に対する危機意識の高まりに比例して警備隊の規模は拡大につぐ拡大を続けたが、ポーツマス講和条約でついに枷をはめられた。また講和条約は、1907年に日本が鉄道警備を行う独立守備大隊と満洲駐劄師団を編成することを許した。同年には清朝も東三省総督を創設して北洋軍を移駐し、満洲の地域防衛を強化する。日本と清の台頭の中で、ロシアの軍人たちが深刻に捉えたのは急速に規模と質を向上させる清軍、とりわけ北洋軍の動きである。これに対して、1907年には警備隊も再編成を行い、2万を越える兵力を維持して、満洲における軍事バランスで一角を占め続けた。

満洲に進駐した初めての外国軍である警備隊は、清の統治が続いていた地域の軍事バランスに変動と緊張をもたらした。日露戦争の結果、満洲におけるロシアの軍事的優位は崩れるものの、それは清が地域の主権を回復することを意味しなかった。1907年に日清露の各国が満洲における戦後体制を確立したことを転機に、満洲の軍事バランスはこの三ヶ国が鼎立する時代へと移行する。その中で警備隊は、ロシアが満洲に公式に配置できた唯一の軍事力として、該地域における日本と清の軍備に対抗する役割を担わされたと言えよう。